

金石範「泥酔の四十二階段」の問題

林 浩 治

金石範は長編『火山島』や短篇『鴉の死』などの済州島四・三蜂起をモチーフにした作品で知られる。しかし、そうした一九四九年前後の済州島を舞台にした小説群のほか、日本を舞台に展開する小説群も少なくない。そしてその中に作家自身が主人公として現れる作品が多数ある。早い時期では一九七四年に上梓された『一九四五年夏』（筑摩書房）など、青年期の自己と周辺の経験を書いたものがある。

「乳房のない女」（『文学的立場』一九八一年五月）もそういった作品の一つで、金石範が二十三、四歳の学生の頃、済州島から密航してきた親戚の女性たちを対馬に訪ねたさいの経験が語られる。このときの経験がのちに金石範が『鴉の死』や『火山島』など、済州島四・三事件をモチーフにした作品を書くに至る原点だ。拷問で両の乳房を切り取られたK女から聞いた済州島の惨状や、留置場で白いタオルを頑なに貸さなかった若い女囚の話は「看守朴書房」などの作品に生きていく。主人公である作家は、一九四〇年代末の済州島の虐殺と、一九八〇年代の光州虐殺を重ねて見ている。「私」

は批評的言説まで述べている。実際の体験や見聞を描き、現在作家として活躍する自己の立場を表出している。批評性も高い。これは「自己の生活体験や心境」を描いた私小説ではない。作家自身の生活感を作品化したものではないからだ。

後期には作家である主人公が登場するケースが少なくない。『夢、草深し』（一九九五年六月）、『地の影』（一九九六年六月）、『海の底から、地の底から』（二〇〇〇年二月）、『満月』（二〇〇一年八月）、『虚日』（二〇〇二年一月）、『死者は地上に』（二〇一〇年一〇月）、『過去からの行進』（二〇一二年二月）などに作家である主人公が登場する。『ずばる』二〇一四年二月号に発表された「地の底から」もそうした作品の一つだ。

これらの作品は在日朝鮮人である作家自身を投影した主人公が、日本と韓国を縦横に結びつけ、韓国の歴史と政治状況に入り込んでいく。それらは済州島ものを中心にした虚構と自己とを結びつける架け橋のような役割を果たしている。これらの小説は政治的志向を表現した論文ではないのは無論だ

が、主人公に託されたものは著者の気分ではない。これは虚構なのだ。金石範は一九七六年に上梓した『民族・ことば・文学』（創樹社）でこう言っている。

文学が、日本語を使っているにもかかわらずこの私を救うるとすれば、それはそれが虚構による普遍への繋がりをもっているからでしかない。虚構こそがことばに閉ざされた私をひらくものであり、日本語をとおしてなお「朝鮮」へ私をつなぐ道である。

支配者の言葉である日本語で書く以上、日本語のメカニズム（民族性）の支配のもとに、朝鮮人であるという自己確認によって書くならば、（個別的な民族性に対して超越的であるところの普遍性）に虚構という手段によって、朝鮮へ繋がるしかない。在日朝鮮人作家としての金石範は虚構によってしか存在し得ない。つまり小説の主体は作家自身でありながら作家自身では無い。虚構の産物としての自己なのだ。これは自己表出ではなく、もちろん指示表出などでもない。「他表出」とでも呼ぶべき表現だ。

「泥酔の四十二階段」（『文学界』二〇一三年二月）も主人公が作家自身である小説の一つだが、他の作品とは趣きが異なる。

「泥酔の四十二階段」は、バーJからの帰り道、酔っ払った小説家KがJR・N駅の階段天辺から転落、そのまま救急車で運ばれて入院する話だ。（実際に西川口駅から金石範自身が転落した事件をモチーフにしている）このときKは七十歳だ。

もしその四十二階段を無事に上り切って、目的のホームに立っていたとすれば、いまこうしてホームに立つことはなかっただろうとKは思った。

ホームに立っていたならば、ホームから転がり落ちて列車に轢かれたに違いない。そもそもK自身の階段からの転落も、一旦死神の掌中に入ったところで掴み損ねたその手からこぼれ落ちた命にすぎぬのだった。

「乳房のない女」から「地の底から」まで主人公が金石範自身である作品の多くは、虚構として再構成され時空を飛んで意識が済州島へ向かって行く（それらに関しては別稿を用意するつもり）。「泥酔の四十二階段」は事実をそのまま書いてる（と思われる）。主人公の視線も済州島に向いていない。政治的状況の描写は見られない。ただただバーの女に振られた中年（老年？）が酔っ払って駅の階段から落ちて怪我する話だ。事件自体は『火山島』連載中のことだ。これは自己表

出性の高い作品ということになる。

この小説を書いた意味は、まさに陳腐な言葉になつてしまふが作家の内的欲求なのではないか。『火山島』という大作を執筆中に見失いがちな自己を取り戻す行為、というのは想像でしかない。内的欲求に沿つてそのまま書くという行為は、若い行為のように思われがちだが、実際は成熟した文学的営為なのかも知れないと思ひ直した。「若い」という名の成熟がここに見られる。これは虚構の登場人物である自己を表出する言わば「他表出」ではなく、自己表出そのものだ。これは私小説である。『泥酔の四十二階段』の主人公と同じ七十歳の金石範は、「火山島」第二部の連載（『文學界』）を終え、『夢、草深し』を出版し、『群像』に「黄色き陽、白き月」を掲載した年だ。

a 「火山島」・「鴉の死」等

⇔

b 「満月」・「死者は地上に」・「過去からの行進」

「1945年夏」・「乳房のない女」

⇔

d 「夢、草深し」・「虚日」

⇔

f 「海の底から、地の底から」・「地の影」「光の洞窟」

⇔

g 「泥酔の四十二階段」

分類など愚かなことだが、敢えて私小説性の低い作品から、高い作品へ並べてみた。厳密さに欠けるので異論は引き受けらる。

「私小説」の定義は曖昧だ。たんに作者の体験を素材にした小説とすると広義に過ぎる。ここで筆者がいうのは、作者とその周辺の出来事、言い換えれば私生活を、主観的であれぼほ事実在即して書き、そこに作者である一人称の心情が込められた小説を指している。作者自身の生活や家族や友人・恋人を描くが、その目的は自己確認である場合が少なくない。社会の下部構造には引きずられるが、政治からは超然としている。孤高の民族主義者金石範とはかけ離れた小説に思える。しかし、金石範の作品にまつたく私小説的傾向がないとは言えない。例えば『地の影』の「第二章 テコとコマ」「第三章 黄色き陽、白き月」は私小説的傾向が強い。『地の影』の第一章から第三章はそれぞれ別の作品として発表され、しかし短篇連作のような形であつた。発表誌は第一章にあたる「炸裂する闇」と第二章の「テコとコマ」が『すばる』、第三章の「黄色き陽、白き月」が『群像』と一貫しない。三作に通じるテーマは死であり、猫が重要なモチーフとして共

通する。その二匹の猫テコとコマはトリックスター的働きをする。第二章を一編の短編小説「テコとコマ」として読むと、これは私小説だ。主人公の家に同居するようになった二匹の猫と家族、近隣住民との関係、友人との諍いなどが、二匹の猫の出現と失踪そして一匹の死との遭遇が描かれ、猫の老いに自己を重ねて見る。こうした点は作者自身の私生活を映した点で「泥酔の四十二階段」と同様、私小説的要素が強いと言える。しかし、一冊の小説として捉えた場合に、私小説とは言いがたい政治性や批評性も見えてくる。

『地の影』までは、生活感が見え隠れするが、金石範が生きてきた政治性が客観視されている。この主人公は自己でありながら他者として描かれた。

「泥酔の四十二階段」はどうか？ 「自同律の不快」という概念は埴谷雄高の言葉で埴谷文学の代名詞的用語だ。「私が私であることの不快」を全存在へ拡大するのが文学論的には正しいのだろうが、取り敢えず「私が私であることの不快」とだけ広く解釈すると、私小説の多くが自同律の不快を抱えている。そして「泥酔の四十二階段」も自動律の不快を内包した小説だ。

主人公のKはバーの女性を思つて酔っ払い、駅の階段から転落した自己を恥じとして晒した。(おれが死ぬ。そんなやつは死んでしまえばいいだろう。おれもそう思う。死んでい

ないおれもそう思う。) この私的感傷は濟州島四・三事件にも、在日朝鮮人組織にも向かっていない。この意味するところは何だろう。発表が『文學界』二〇一三年二月号だから、執筆はおそらく二〇一二年、八十七歳の金石範が七十歳の自身に託した自己確認だ。

金石範が生涯をかけたテーマである濟州島四・三事件は二〇〇三年一月三十一日に盧武鉉大統領が公式に謝罪し、二〇〇六年からは濟州飛行場などの集団虐殺現場で遺体発掘が行われた。遺体発掘は一つの区切りになった。現実の遺骨を前にして、震える作家の精神はいかかなものであつたか。畏れの念を強くし、作家としての己を問い直したに違いない。遺体発掘の経験は二度書かれた。最初に『すばる』二〇〇八年二月号に紀行文「私は見た、四・三虐殺の遺骸たちを」掲載した。これは事実の記録である。二作目は小説としては『すばる』二〇一四年二月号に発表した「地の底から」だ。(二作の関係と違いに関しては愚銀のブログに「畏怖する文学 濟州島四・三事件の記憶は回復されるか」<http://kabayashi.cocolog.net/ty.com/bl og/2014/01/post-4b45.html>を覗いてみる)。

老年に至つて改めて感じた書く畏れとは何か。随筆や紀行文と小説の違いは何だ。「泥酔の四十二階段」は書く畏れの表れ、象徴だと言つたら穿ち過ぎだろうか。